

## 論文

## 〈とき〉をあらわす従属接続詞

—「途端（に）」「拍子に」「やさき（に）」などを例として—

村 木 新次郎

学芸学部・日本語日本文学科

## 1. 問題の所在

現代日本語の中には、連体節（正確には擬似連体節）をうけ、接続詞に相当する機能をはたしている単語が少なからず存在する。たとえば、以下のような「かたわら」や「拍子に」がそれである。このような用法をもつ単語を、擬似連体節をうける従属接続詞と位置づけることにする<sup>(注1)</sup>。

- (1) 作業場にたてこもって、注文の鳥籠や茶器をつくるかたわら、手ヒマをかけてつくったこの竹人形は、見事な出来栄えといえた。 (雁の寺)
- (2) 結願の当日岩殿の前に、二人が法施を手向けてみると、山風が木々を煽った拍子に、椿の葉が二枚こぼれて来た。 (羅生門)

「かたわら」や「拍子」は、もともと、〈そば／わき〉や〈リズム〉といった意味をもち、品詞論上は名詞に所属する単語である。しかし、例文(1)の「かたわら」や(2)の「拍子に」では、その意味も文中の機能も、もとの用法からかけはなれている。

例文(1)における「かたわら」は、〈そば／わき〉という空間をさししめず意味ではなく、〈あることをしながら、(さらに他のことをする)〉といった時間的かつ文脈的な意味をになっている。また、例文(2)における「拍子に」は〈リズム〉ではなく、〈あることが成立する直後に、(それがきっかけとなって別のことがおこる)〉といった時間的かつ文脈的な意味をになっている。

さらに、例文(1)の「かたわら」は、「かたわら+φ」という形式、すなわち格語尾をとらないという形態上の特徴がみとめられる。例文(2)の「拍子に」も、「拍子に」という語形の固定化がみとめられる。そして、双方とも、

文相当(例文(1)(2)における波線部)の形式をうけ、あとにつづく主節にかかっていくという接続の機能をはたしている。つまり、「かたわら」も「拍子に」も名詞の格機能を喪失していて、先行する節を後続の節につなぐ機能をはたしている<sup>(注2)</sup>。

こうして、これらの単語は、意味的には、もとの意味をうしない、文法的にはその語形が固定化し、名詞の格機能をうしなって、名詞ばなれをおこしている。名詞の性質をうしなうかわりに、先行する文相当の形式をうけ、あとに続く主節に接続するという従属接続詞としての機能を獲得しているのである<sup>(注3)</sup>。一種の文法化である。「かたわら」も「拍子」も、自立的な単語で、中心的な品詞である名詞から、非自立的な単語で、周辺の品詞である従属接続詞に変化した単語の例といえる。

本稿では、〈とき〉に関与する「たび」「ついで」「拍子」「はずみ」「やさき」「最中」「さなか」「おり」「際」の10語を対象に、現代日本語の中で、これらの単語がどのような文法的機能をはたしているかをとりあげる。これらの多くは、名詞に起源をもち、語彙の意味と機能が変質することによって、文法的な品詞である従属接続詞となったものと考えることができる<sup>(注4)</sup>。これらの諸形式の文法化の度合いはさまざまで、中心的な品詞である名詞からの機能語化が完全に進んだものから、機能化の程度が不完全にしか進んでおらず、それが過渡的な段階にとどまっている、中間的なものまでである。また、これらの形式にみられる重要な特徴は、副詞・接続詞、後置詞、従属接続詞、助動詞といった多品詞を兼務するという点である<sup>(注5)</sup>。なお、名詞と副詞は、語彙的な側面と文法的な側面をあわせもち、多数の単語からなる主要な品詞であるのに対して、接続詞、後置詞、従属接続詞、助動詞は、おもに文法的な側面をになっている、少数の単語からなる周辺の品詞である。

本稿では、まず、10の単語の文法的な多機能性を問う。文法的機能は品詞として集約されるので、個々の単語の品詞性をもって整理することにする。ただし、ある品詞と他の品詞との関係は、つねに離散的排除的な関係ではなく、

連続的なところもある。ある用法がふたつの品詞の中間に位置するといったこともある。ある品詞と他の品詞との間に絶対的な壁が存在しているわけではなく、ふたつの品詞の特徴をあわせもっていることもあるし、ある品詞から別の品詞への移行の段階にあるものもありうる（2章）。

次に、これらの形式が擬似連体節をうける従属接続詞としての用法について、個々の従属接続詞がなう従属節の文法的カテゴリー、とりわけ従属節を構成する述語部分の語形とそれにもとづく述語の形態論的なカテゴリーについて吟味する（3章）。

## 2. 諸形式の文法的機能——品詞性

本稿でとりあげる単語の文法的な機能を記述する。単語の文法的なカテゴリーを集約させたものが品詞であるとし、個々の単語の品詞性を問う。なお、ここで問題とするのは、現代日本語であり、通時的な考察を旨とするものではない。小説と新聞に使用されたもっぱら書きことばを対象に、当該の単語の文法的な諸相を記述し、整理しようとするものである。小説の中の会話文や新聞にあらわれた引用箇所などに話しことばの用例もみられるが、それらは全体としては、あまり多くない。

この稿でかわりをもつ名詞・副詞・後置詞・従属接続詞・接続詞・助動詞の定義を記しておく。

名詞の中心機能は、文中で主語や目的語になることである。形態的には「-ガ」「-ヲ」の格助辞をしたがえ、格の体系をもつ。これらの名詞が実質的な意味をもたず、つねになんらかの規定語句を必要とするならば、それは形式名詞と位置づけられる。

副詞の機能は、用言（動詞・形容詞）を修飾することである。語形変化の体系をもたない。

後置詞の機能は、単独で文の成分となれず、名詞の格の形とくみあわさって、その名詞の他の単語に対する関係をあらわすことである。「(日本に) について」「(わたしに) にとって」「(台風の) ために」「(悲しみの) あまり」「(買い物) の ついでに」などがその例である。動詞や名詞から派生したものが多く、形態的には、動詞の中止形と一致するものと、名詞の一語形と一致するものがある。もとの動詞や名詞の性質を部分的にとどめているものがある。

従属接続詞の機能は、文相当の形式をうけて、後続の（主）節に接続することである。動詞や名詞から派生したものが多く、形態的には、動詞の中止形と一致するものと、名詞の一語形と一致するものがある。もとの動詞や名詞の

性質を部分的にとどめているものがある。なお、後置詞と語形と意味が共通するものが多い。後置詞は名詞相当の形式をうけるのに対して、従属接続詞は文相当の形式をうけるという違いがある（「(買い物) の ついでに」と「(買い物) に行く」 ついでに、「(あなたの) おかげで」と「(あなたが来てくれた) おかげで」）。

接続詞の機能は、独立語として、先行する文をうけて、後続の文につなげることである。

助動詞の機能は、述語になる形式をうけて、文法的な意味をなうものである。「(たべる／たべた) はず／わけ／ところ／だけ／…だ」などがその例である。

なお、本稿でとりあげる形式が合成語の部分となることがある。合成語には、「度重なる」「真っ最中」のような固定的な合成語と「買い物ついでに」「復興さなか」のような臨時的な合成語とがある。ここでは、そのような合成語は考察の対象としていない。

### 2.1 「たび（に）」

「たび（に）」には、後置詞としての用法（3）（4）、従属接続詞としての用法（5）（6）がある。「たび」は、「このたび」「そのたび（に）」といった形式で一語化し、副詞のように用いられることがある。ちなみに、「あのたび（に）」とはいわない。「度がかさなる」「度をかさねる」という慣用句として、化石化した名詞的用法がある。なお、口語では「たんび（に）」になることもある。

（3）その場所では、また地震が起きやすく、地震のたびに何回も岩盤がずれます。（毎日95.01.21）

（4）福祉ひとつを取ってみても与野党の選挙公約のたびに金額をせり上げることをやってきた。（毎日95.01.21）

（5）電車が通るたびに、私たちの椅子と、私たちのガラスが震えた。（風に吹か）

（6）車の輪が瓦のかけらに乗りあげるたびに、細引が僕の肩をぐっと後へ引き起す。（黒い雨）

### 2.2 「ついで（に）」

「ついで（に）」には、名詞としての用法（7）（8）、副詞あるいは接続詞としての用法（9）（10）、後置詞としての用法（11）（12）、従属接続詞としての用法（13）（14）がある。名詞としての「ついで」は「ついでがある」「ついでをもって」という形式で慣用化している。例文（9）（10）の用法は、副詞とも接続詞とも位置づけられるもの

である。副詞・接続詞・後置詞・従属接続詞では「ついでに」の語形でもちいられる。

- (7) 父上も、この年になって不料簡を、とお思いになるかもしれませんが、何かのおついでがあればよろしくお伝え下さい。(新源氏物)
- (8) そして「余裕がある時、気分が良い時、ついでがある時に作ること。イライラしている時に無理して作ると、うまくいかない」とアドバイスする。(毎日91.09.01)
- (9) 屋敷神のまわりも除草して、ついでに庄吉さんのうちの池へも参観交代に行ってきた。(黒い雨)
- (10) 亮子は、お時を夫の道具と思って割りきっており、ついでに情死の道具にもしました。(点と線)
- (11) トイレ休憩のついでに、販売所に寄っていく利用者が多く、特産品「佐波イチゴ」を使ったソフトクリームやチューリップなどの花が人気を集めていた。(毎日05.02.20)
- (12) 取材のついでに酒田北港でハタハタ釣りをしてみた。(毎日04.12.16)
- (13) 公園の中の売店で煙草とマッチを買うついでに、公衆電話から私は念のためにもう一度私の部屋に電話をかけてみた。(世界の終)
- (14) 彼はどうしていいかわからないので、使いに出たついでに、稲葉屋に寄ってみた。(路傍の石)

## 2.3 「途端(に)」

「途端(に)」には、副詞あるいは接続詞としての用法(15)(16)、従属接続詞としての用法(17)(18)がある。「途端」は、現代日本語において名詞の用法をもたない。「その途端」という形式で一語化し、副詞のように用いられることがある(19)。ちなみに、「この途端」「あの途端」とはいわない。

- (15) 「狂いまわるような苦しみかたで、黄色い水をげぶげぶ吐きましてなあ。途端、がっくりとなったですけん」と云った。(黒い雨)
- (16) 動けないとなると途端に痼癢を起こして、お手伝いの育子さんの世話の焼き方が気に入らなくなり、電話で私を呼びつけたのです。(錦繡)
- (17) 僕は筆記する手を休めて庭を見たが、赤いカボチャが目映った途端に涙が湧いて来た。(黒い雨)
- (18) 踏みこたえて目を上げた途端、さあと音を立てて

天の河が島村のなかへ流れ落ちるようであった。

(雪国)

- (19) その途端、どこかの小屋で、屋根の雪がどおっと谷じゅうに響きわたるような音を立てながら雪崩れ落ちた。(風立ちぬ)

## 2.4 「拍子」

「拍子」は〈リズム〉などの意味で名詞として用いられる。一方、そこから派生した〈機会／きっかけ〉の意味では、後置詞としての用法(20)(21)、従属接続詞としての用法(22)(23)がある。後置詞や従属接続詞での使用には、「拍子に」「拍子で」の双方の語形がある。前者は契機的なニュアンスが、後者には因果的なニュアンスがよみとれる。後置詞としての用法としたものは「何かの拍子に／で」「ものの拍子に」といった慣用的な表現である。「その拍子に」の形式で一語化し、副詞のように用いられることがある(24)。ちなみに、「この拍子に」「あの拍子に」とはいわない。

- (20) だが、何かの拍子にこの酵素がこわれたり、きずついたりしたそのときに、マラソンが入ってくると、マラソンの毒は思う存分あばれまわる。(沈黙の春)
- (21) 何度か開け閉めしたところ、戸袋から長さ約5センチの金属棒が出てきた。傘の先端部分らしく、何かの拍子でドアの開閉を邪魔したらしい。(朝日05.03.18)

- (22) 結願の当日岩殿の前に、二人が法施を手向けていると、山風が木々を煽った拍子に、椿の葉が二枚こぼれて来た。(羅生門)
- (23) どうかすると階段を下りる拍子に、二人の肩と肩とが触合うこともある。(破戒)
- (24) 「今でもよく覚えていますが、僕の右ストレートがパーンと顔面に当たったんですよ。まぐれに決まってますけど、その拍子に内藤さんのヘッドギアがガクッと後にずれてしまったんですね。……」(一瞬の夏)

## 2.5 「はずみ」

「はずみ」には、名詞としての用法(25)(26)、副詞としての用法(27)(28)、後置詞としての用法(29)(30)、従属接続詞としての用法(31)(32)がある。副詞・後置詞・従属接続詞としての用法には「はずみに」と「はずみで」の双方の語形がある。「はずみに」は〈とき〉の意味

に限られるが、「はずみで」の形式の使用は、〈とき〉にくわえて、〈原因〉のニュアンスをそえている。後置詞としての使用は「何かのはずみに／で」「もののはずみで」という形式で慣用性が高い<sup>(注6)</sup>。

- (25) そして、良い習慣が身につくたびに、自信もでき、さらに良い習慣を身につけるはずみがつくでしょう。

(朝日03.02.15)

- (26) 今度の国際会議が手を携えて高齢化を乗り切るはずみになればいい。

(朝日04.08.29)

- (27) この時、川波にゆれた舟が大きくかたむき、はずみに、下腹の胎児がぐると一回転して下降する気がした。

(雁の寺)

- (28) すかさずふるった、ロープの先の鉄に、手応えがあり、犬は、うらみがましい悲鳴をあげて、ふたたび影に融ける。おかげで、ズボンの裾を食い裂かれただけですんだ。はずみで、足をとられはしたが、倒れながら一回転して、立上るなりもう駆け出している。

(砂の女)

- (29) そのうち、何かのはずみに、パタリと片方のツケマツゲが井の中に落ちた。たぶん湯気のせいかもしれない。

(風に吹か)

- (30) おそらく「彼」が何かのはずみで校舎の屋上から落ちたのだろう。

(エディプ)

- (31) 彼らは息をつこうとして口をあけたはずみにおぼれてしまったのだ。

(パニック)

- (32) 事故は、タンクの内ぶたを固定する支柱が腐食して破断し、内ぶたが内壁に衝突したはずみで引火し、爆発したとみられる。

(毎日05.04.14)

## 2.6 「やさき」

「やさき」は、〈矢の先／矢面〉の意味で名詞として用いられる。一方、〈ちょうどそのとき〉の意味では、後置詞としての用法 (33) (34)、従属接続詞としての用法 (35) (36)、助動詞としての用法 (37) (38) がある。後置詞と従属接続詞としての使用は「やさき」と「やさきに」の双方の語形がある。助動詞としての用法は動詞の「シテイタ」「ショウトシタ」などの形式をうける。

- (33) パウエル長官の調停活動の矢先に米大統領報道官がイスラエル軍の作戦を容認する発言を行った。

(毎日02.04.14.)

- (34) 「喜ばしい日の矢先に見たのは、つらく悲しいニュー

スばかりだった」と振り返る。(毎日04.04.26.)

- (35) 夫婦があきらめかけた矢先、不妊治療が成功して、ジヌオンが妊娠する。

(毎日02.06.07)

- (36) 三井容疑者は「検察の調査活動費は裏金」とマスコミや国会などで告発しようとした矢先に逮捕された。

(毎日02.05.11.)

- (37) 「武部 (勤) 農相に雪印のような事件が他にもあるかないか検査する必要があるんじゃないかと言っていた矢先だ。……」

(毎日02.02.28.)

- (38) 森山真弓法相は会見で「(調活費疑惑は) 事実無根との結論が出ている」と述べたが、逮捕は三井被告がマスコミに接触しようとした矢先だった。

(毎日02.05.30)

## 2.7 「最中」

「最中」には、名詞としての用法 (39) (40)、後置詞としての用法 (41) (42)、従属接続詞としての用法 (43) (44)、助動詞としての用法 (45) (46) がある<sup>(注7)</sup>。名詞としての用法は、独立の用法はなく、なんらかの規定語句を義務的にとる。後置詞と従属接続詞としての使用は「最中に」の語形である。助動詞としての用法は動詞の「シテイタ」「シテイタ」「シツツアル」「ショウトシタ」「スル」「シタ」「サレル」などの形式をうける。「シテイタ」「シテイタ」の形式が多く、「スル」「シタ」はまれである。

- (39) 平凡でのんきな私だが、句作の最中だけは、もしかしたらと気になって仕方のない言葉がある。

(朝日04.12.12)

- (40) 「作ってはみたけど、どうするかなア」。スポンジ製の最初の型から四年かけ、メッシュとゴムの最新型を完成したが、「売り込む余裕がない」。「作っている最中が楽しくて、できてしまうとそうでもないんだなア」。

(毎日96.01.01)

- (41) 何故ならこのとき、この醜悪な礼拝の最中に、俺は自分が昂奮しているのに気づいたから。(金閣寺)

- (42) 参加者の女性が自己紹介の最中に泣き出した。

(毎日04.12.09)

- (43) 泳いでいる最中に靴が脱げたらしく、私も由加子も濡れた靴下から海水をしたたらせて立っていました。

(錦繡)

- (44) 拳世滔々としてその風潮に向っている最中に、正宗さんという人は胸のすくようなことを書いてくれたと強い印象を受けた。

(黒い雨)

(45) 柱の陰で、熱烈にアベックが愛し合っている最中  
だったのである。(女社長に)

(46) 迎えに来た妻が居酒屋の駐車場を間違え、有料駐  
 車場に移動させようとした最中だった。  
 (毎日03.10.29)

## 2.8 「さなか」

「さなか」には、名詞としての用法 (47) (48)、後置詞としての用法 (49) (50)、従属接続詞としての用法 (51) (52)、助動詞としての用法 (53) (54) がある。後置詞や従属接続詞の場合は、「さなか」あるいは「さなかに」の双方の語形がある。助動詞としての用法は動詞述語の「シテイル」「シテイタ」などの形式をうける。

(47) 1991年に旧ソ連が崩壊し、混乱のさなかから来た  
 ゲルジア人は、観光に連れ出してもすぐに電化製品  
 や中古車の店に行きたがる。(毎日01.02.27)

(48) 子供たちは毎日「交通戦争」のさなかを生きてい  
 る。(毎日01.11.20)

(49) 高度経済成長のさなか、冬は都会に出稼ぎに行っ  
 た方がもうかる。(毎日04.09.18)

(50) 日米安保闘争のさなかに大学生活を送った。  
 (毎日04.12.21)

(51) しかし最終段階の接続テストで生じた細かな修正  
 ポイントのやり取りを継続しているさなかに、  
 FIFAは受け付けを「見切り発車」した。  
 (毎日01.02.26)

(52) 車内の光景を少々疎ましく思っていたさなか、あ  
 の紳士にいやされた気がします。(毎日01.02.01)

(53) 独立してデイサービスなどの介護事業を始めるか、  
 ケアマネジャー資格を取るか悩んでいたさなかだっ  
 た。(毎日05.01.03)

(54) イスラム教徒にとって最大の宗教行事であるハッ  
 ジ(大巡礼)を直前に控え、イスラムの守護者を任  
 じる同国では武装勢力への警戒を強めているさなか  
 だった。(毎日04.01.30)

## 2.9 「おり」

「おり」には、名詞としての用法 (55) (56)、後置詞としての用法 (57) (58)、従属接続詞としての用法 (59) (60) がある。後置詞や従属接続詞の場合は、「おり」「おりに」の双方の語形がある。

(55) 文太郎は父の眠った折を見計らって町のはずれの  
 宇都野神社へでかけていった。(孤高の人)

(56) 「こう教官の目が光っていたんじゃ、けりをつけ  
 るおりがねえよ。おい、やっぱ、そろそろけりをつ  
 けなくちゃいかな」(冬の旅)

(57) それに、明治五年、官有地はらいさげのおり、正  
 式に官から払いさげを受けたものであるから、村の  
 所有に相違ないと言うのだった。(路傍の石)

(58) ある日かれは、風水害のおりに取り出した、ツツ  
 ラの中をかきまわしていた。(路傍の石)

(59) 朝はやくおきて、そとをあるきに出るおりに、牧  
 場のほとりを通りかかると、それが晴れた朝ならば、  
 きまって見る風景がある。(焼跡のイ)

(60) 「何だこら、何をぬかす。馬鹿も、休み休み云え。  
わしが広島から逃げ戻ったおり、あのとき小母はん  
 は、わしの見舞に来たのを忘れたか。わしのことを  
 尊い犠牲者じゃと云うて、嘘泣きかどうかしらんが、  
 小母はんは涙をこぼしたのを忘れたか」(黒い雨)

## 2.10 「際(に)」

「際(に)」には、後置詞としての用法 (61) (62) と従属接続詞としての用法 (63) (64) がみられる。「際」は、名詞の用法をもたない。「際」と「際に」の双方の語形がある。「際(に)」は機能語専用の形式である。ただし、「～際の」というみずからが連体節をうけ、後続の形式に連体的にかかっていく用法があるが、これについては、後述する。「この際」「その際」の形式で一語化し、副詞のように使用されることがある。

(61) なぜ私が、離婚の際、そのことを話さなかったの  
 かは御理解いただけるでしょう。(錦繡)

(62) 父親の大工は西安寺住職の口ききで、本山改築の  
 際に下働きにきたことがあった。(雁の寺)

(63) 会社からのお迎えの車が来て、マンションの前の  
 石段を降りる際、踏み外して足首をひどく捩ってし  
 まいました。(錦繡)

(64) 諸説紛々で定かではないが、一説によると、紀元  
 前四世紀にトロイを訪れたアレクサンダー大王とそ  
 の友人たちが、アキレスの墓に詣でた際、古代の風  
 習にのっとり墓の回りを裸で走り回ったのがその  
 起源という。(若き数学)

以上、この章で記述したことを整理すると、表1のよう

表 1

品詞 語例	名 詞	副詞・接続詞	後置詞	従属接続詞	助動詞
1. たび	—	—	+	+	—
2. ついで	+	+	+	+	—
3. 途端	—	+	—	+	—
4. 拍子	+	—	+	+	—
5. はずみ	+	+	+	+	—
6. やさき	+	—	+	+	+
7. 最中	+	—	+	+	+
8. さなか	+	—	+	+	+
9. おり	+	—	+	+	—
10. 際	—	—	+	+	—

になる。

なお、当該の形式が連体節をうけて「の」を介して、後続の名詞（あるいは名詞相当）につながっていくものがある。「たび」「ついで」「途端」「拍子」「はずみ」にはそのような用法はみとめられないが、「やさき」「最中」「さなか」「おり」「際」には、以下のように、そうした用法がある（例文（65）～（69））。こうした用法は、連用の機能を本来とする副詞が、ときに連体の用法をもつのと類似している。あるいは、「たび」～「はずみ」の単語は、〈とき〉の意味・用法にかかわって、名詞性がないのに対して、「やさき」～「際」の単語は、部分的に名詞性を内在させているとみることができる。

（65）公共料金など口座振り替え処理の遅れを取り戻そうとしていた矢先の2日、衝撃的な報告が、個人・中小企業取引を主体とするみずほ銀行の担当者から、グループ首脳に伝えられた。（毎日02.04.30.）

（66）今年2月から計12回、地域住民を招いて見学会を行うなど信頼回復に努めてきた最中の知らせに、従業員たちは大きなショックを受けていた。（毎日01.05.19）

（67）やっと光が見えたさなかの廃部決定だった。（毎日03.07.06）

（68）巨大な武蔵が沈没する折の渦潮に巻きこまれることを恐れているにちがいがなかった。（戦艦武蔵）

（69）ただ今でもはっきり覚えているのは、初めて東舞鶴の駅に降り立った際の、心が縮んでいくような烈しい寂寥感です。（錦繡）

「途端（に）」「際（に）」は、現代日本語の中では、名詞の用法をもたない。「途端（に）」は、副詞（あるいは接続詞）の用法と後置詞・従属接続詞としての機能語の用法とを兼務している。「際（に）」はもっぱら文法的な単語として定着した漢語である。「最中」は名詞の用法はもつが、つねに規定語句を必要とし、自立できる形式ではない。これももっぱら機能語として発達した漢語であると考えられる。

### 3. 諸形式の従属接続詞としての用法

この章では、個々の従属接続詞がどのような擬似連体節から構成されているかを観察する。擬似連体節を構成する述語部分の文法的な諸形式に注目する<sup>（注8）</sup>。とりあげるのはほとんどの場合、動詞述語である。そうした動詞述語を「スル」「シタ」「シテイル」「シテイタ」「シナイ」といった形式であらわすことにする。使役をマークする「-サセ-」、受動をマークする「-サレ-」、丁寧をマークする「-マス-」にも注目する。さらに動詞のもつ形態論的なカテゴリーを問う。ヴォイス、アスペクト、テンス、肯定否定、スタイル（丁寧さ）、ムードをとりあげる。なお、テンスとムードは、狭義には、本来、発話の終止用法における文法概念である。ここでは、便宜的に、従属節の内部にみられる「スル／シタ」の語形上の対立のあるものを「テンス」、「スル／ショウトスル」の語形上の対立があるものを「ムード」としておく。

形態論的なカテゴリーの有無をとりあげるとき、それが完全な場合と不完全な場合がある。両者は連続的である。完全な場合とは、当該の対立がつねに成立するものであり、

不完全な場合とは、対立が成立したり成立しなかったりするものである。

数多い用例の中には、一般的な使用にはみられない、孤立した具体例に出くわすことがある。このような孤立した実例を孤例とよぶことにする。ここでは、そのような孤例についても言及していく。そのような孤例は、ときには誤用であり、また地域的な使用、すなわち方言である場合もある。そのほか、個々の使用例について、さまざまな解釈と説明が可能であろう。どのような孤例が存在するかというのも、言語の現象として興味ある事実である。言語現象には、しばしば確固たる中心部分もあれば、その中心からはずれた周辺部分もあるのである。中心部分は中心部として、周辺部分は周辺部として位置づけなくてはならない。

### 3.1 「たび（に）」

「たび（に）」は、ある事態が成立すると〈いつも〉、別の事態が成立することを予告する。「たび（に）」は、事態そのものの成立時（過去・現在・未来）については関与しない。主節のときに一致する。〈いつも〉を特徴づける特定の述語形式は存在しない。それらの意味は「たび（に）」によってなわれているためか、述語形式は、無標の「スル」が用いられる（70）（71）。述語は動词的述語で、動詞の「スル」に限られる。例文（71）の「ある」は、モノの存在を意味する静的述語としての「ある」ではなく、コトの存在を意味する動词的述語としての「ある」と考えられる（「死者のある」＝「死者の出る」）。ヴォイスの有標形である、使役の「-サセ-」や受動の「-サレ-」のこともある（72）（73）。受動の例は比較的多く、使役の例は少ない。

「たび（に）」節の述語形式には、ヴォイスとムード<sup>(注9)</sup>のカテゴリーは存在するが、テンス、アスペクト、肯定否定、スタイルのカテゴリーは存在しない。

- (70) 青雲堂主人が力をこめて朗々とよみあげるたびに、壇の後方の椅子に腰かけさせられている歐洲の妻千代子は、羞恥に堪えかねる思いがした。（榎家の人）
- (71) 「閑間君、坊さんの代りになって、君は死者のあるたびにお経を読みたまえ」（黒い雨）
- (72) グループ・サウンズをどう思うか、とたずねられるたびに私の頭に浮んでくるのは、斎藤緑雨の次のような戯文である。（風に吹か）
- (73) これから被害者を帰国させるたびに首相が訪朝して、お金を払わないといけなのか。（毎日04.06.17）

「たび（に）」節の述語は（ヴォイスの使役や受動をふくめて）動词的述語の「スル」形に限られるのであるが、まれに、次のような「スル」以外の形式で使用された例がある。以下には、そうした孤例を取りあげる。

「シタたび（に）」の形は、ごくまれにしかあらわれないものである。『新潮文庫の100冊』CD-ROM 所収の日本人作家の作品中、例文（74）の1例のみであった。また、毎日新聞の過去約15年分のデータから採集できたのは、例文（75）の1例である。例文（75）は、規範的には、「……利用するたびに介助料金を支払った」と従属節と主節でテンス形式を入れ替えて使用するものと思う。

- (74) 調子のよい養父基一郎の自慢話も、徹吉の耳には決して奇異にはひびかなかった。そういえば、徹吉が一高、帝大に入学できたたびに養父はよく言ったものだ。（榎家の人）
- (75) 利用者は入会金（2000円）と年会費（3000円）を払って会員となり、通院の送迎や買い物などに利用したたびに介助料金を支払う。（毎日99.01.07）

次に「シテイルたび」の形の具体例をしめす（76）（77）（78）。この例も極めてまれにしかあらわれない。（77）（78）の例は投書欄でみつかったもので、前者は中学生からの、後者は小学生からのものである。ちなみに「シテイタたび」の実例はみつかっていない。

- (76) イエローカード導入前は、空き缶や、いす、クリーニングの針金ハンガー、なべ、コンクリート片が入っているたびに、搬入自治体側に、引き取ってもらう一方、てんまつ書を出してもらっていた。（朝日98.12.09）
- (77) 今、一生懸命練習しています。今はまだ未完成だけど練習を続けているたびにいい音が出るといいますのでがんばりたいです。（毎日04.08.19）
- (78) バンダたちは1回ほほぶくろに入れてもっていて、そしてほほぶくろからだして食べます。見ているたび「好きなんだな。」と思います。（毎日98.08.23）

「シナイたび」の具体例もわずかながら存在する（79）（80）（81）。「うまくいかない」「意見が通らない」「思い通りに行かない」という精神・心理活動の表現ばかりである。ちなみに「シナカッタたび」の実例はみつかっていない。

(79) 私がガラスという素材に出合ってから約11年たちます。……。うまくいかないたびにガラスという素材に向き合い、話し合いながら制作活動を続けてきました。(毎日03.01.30)

(80) 自分の意見が通らないたびに辞めるのなら、議員がいなくなってしまう。(毎日01.05.03)

(81) アリヨマリ仏国防相は23日夜、「思い通りに行かないたびにいらついても、それは自分の責任」と長官を批判した。(朝日03.01.25)

なお、ここでの「たび」を「とき」や「場合」に置き換えれば、自然な表現となる。あとで、とりあげるが、「とき」や「場合」には、述語形式の制限がきわめてゆるいのである。

### 3.2 「ついでに」

「ついでに」は、あることを行なうことを〈好機〉として、別のことを行なうことを意味する。述語の形式は、動詞の「スル」(82)「シタ」(83)であり、ヴォイスの有標形である使役の「-サセ-」があらわれることもある(84)。述語になるのは、一般に、人間の行為をあらわすものである。

例文(85)のように、「ついでに」節に無情の主語がくこともまれにある。「ついでに」節には、例文(86)のように、丁寧を意味する「-マス-」があらわれることがある。これらは、孤立した例としてよいのかもしれない。

「シテイル／シテイタついでに」「シナイ／シナカッタついでに」といった形式は存在しない。

「ついでに」節の述語形式には、テンスのカテゴリーは存在するが、アスペクト、肯定否定、ムードのカテゴリーは存在しない。ヴォイスは部分的に、スタイルは、わずかながら存在する。

(82) 公園の中の売店で煙草とマッチを買うついでに、公衆電話から私は念のためにもう一度私の部屋に電話をかけてみた。(世界の終)

(83) 彼はどうしていいかわからないので、使いに出たついでに、稲葉屋に寄ってみた。(路傍の石)

(84) 平たくいえば、創意工夫を凝らして世の中をアッ！  
といわせたついでに、経済のあり方まで変えてしまおうということです。(毎日00.02.01)

(85) 契約切れが迫ったついでに、電話投票を打ち切ることも考えたが、競馬は私のささやかな遊びである。

(日経03.07.08)

(86) 朝の間に干した洗濯物の乾き具合をたしかめに下りますついでに庭のちらかり物などを片づけたりします(朝日98.06.30)

### 3.3 途端 (に)

「途端 (に)」は、ある事態が成立する〈直後〉に、別の事態が起こることを予告する。「途端 (に)」には、動詞の述語の「シタ」形式につく(87)(88)。使役の「-サセタ」や受動の「-サレタ」といった形式はある(89)(90)。

現在の日本語としては不自然であるが、明治時代の文献には、例文(91)(92)のように「スル」に接続した用例も多い。「ショウトスル／シタ」があらわれることがある(93)(94)(95)。この形式は、ムードに関与する〈意志〉とアスペクトに関与する〈将然〉とでもいうべき意味をあわせて特徴づける。「ショウトシタ」の例のほうが「ショウトスル」よりも多く見られる。「ショウトスル途端 (に)」はいささか不自然な感じもする。「途端 (に)」よりも「瞬間 (に)」のほうが自然である。

「シナイ／シナカッタ」にはつかない。丁寧をあらわす「-マス-」はあらわれにくい。

「途端 (に)」節の述語形式には、ヴォイスのカテゴリーは存在するが、アスペクト、肯定否定、スタイルのカテゴリーは存在しない。テンスとムードは微妙である。

(87) 僕は筆記する手を休めて庭を見たが、赤いカボチャが目に映った途端に涙が湧いて来た。(黒い雨)

(88) 踏みこたえて目を上げた途端、さあと音を立てて天の河が島村のなかへ流れ落ちるようであった。

(雪国)

(89) 同局によると、着陸の後で、APUを作動させた途端、煙が出たらしい。(朝日93.05.03)

(90) 10月初め、この計画が報道された途端、大騒動になった。(朝日04.11.17)

(91) それが舞台へ懸る途端に、ふわふわと幕を落す。(歌行燈)

(92) 我れながら酷く逆上て人心のないのにと覚束なく、気が狂ひはせぬかと立どまる途端、お力何処へ行くとして肩を打つ人あり。(にぎりえ)

(93) 私は物体が二つに見える酔っ払いのように、同じ現実から二つの表象を見なければならなかったのだ。しかもその一方は理想の光に輝かされ、もう一方は暗黒の絶望を背負っていた。そしてそれらは私がはっ



きりと見ようとする途端一つに重なって、またもとの退屈な現実に戻ってしまうのだった。(檸檬)

- (94) 母親の美紀さん(42)によると、頭に浮かんだ言葉が表現しようとする途端に消えてしまうため、音読はできるがコミュニケーションが取れないのだという。(朝日04.11.05)

- (95) パソコン作業などの目と画面の距離、70センチ～1メートル以内に焦点を合わせようとした途端に震え出すテクノストレス眼症も増えている。(朝日04.12.07)

一般に存在しない「シテイタ途端」がまれにある。

「途端」に続く述語形式に、例文(96)(97)のような「シテイタ」の形式が孤例としてみつかった。

- (96) 買い物に行くため、通りかかった保育園前の四つ角は、ちょうど、市道のアスファルト補修工事をしていて、熱気と騒音で、見るからに厳しい仕事だと思っていた途端、ものすごい声とバシッと何かをたたく音がします。(朝日91.10.04)

- (97) 一方、けがをした群馬県館林市仲町の田口憲さんから3人は「こんなに横揺れがひどくて大丈夫かなと、心配していた途端、リフトから投げ出された。その瞬間は、何が何だかわからなかった」と、日光市内の病院で手当を受けながら、ぼう然としていた。(朝日90.06.21)

これらの孤立した2例とも、動詞が「思っていた」「心配していた」という心理動詞である。このような動詞は、終止用法で「思う／心配する」と「思っている／心配している」というふたつのアスペクト形式できわだった意味的な対立をしめさない。つまり、どちらを使っても差がない。こうした終止用法の特徴が、終止用法でないところにおよんだものと思われる。

### 3.4 拍子に

「拍子に」は、ある事態が成立する〈直後〉に、(それが〈きっかけ〉となって)、別の事態が起こることを予告する。「拍子に」は、動詞述語の「シタ」や「スル」につき、「シテイル／イタ」「シナイ／シナカッタ」などの形式にはつかない。丁寧をあらわす「-マス-」はあらわれにくい。現在では、「シタ」形式につくことが多いが(98)(99)、古くは「スル」につくことも多く(例文(23)参照)、現

在でも「スル」につくことがある(100)(101)。使役の「-サセタ」や受動の「-サレタ」といった形式はありうる(102)(103)。多くは、無意志的な運動に使われるが、まれに意志的な運動に使われることもある。例文(102)の「-サセタ」や(104)(105)の「シヨウトシタ」は、そのような意志的な運動の例である。

「拍子に」節の述語形式には、ヴォイスとテンスのカテゴリーは存在するが、アスペクト、肯定否定、スタイルのカテゴリーは存在しない。意志性に関するムードについては存在しうる。

- (98) 結願の当日岩殿の前に、二人が法施を手向けていると、山風が木々を煽った拍子に、椿の葉が二枚こぼれて来た。(羅生門)

- (99) 足が滑った拍子に気絶しておったので、全く溺れたのではなかったと見える。(檸檬)

- (100) 辻村さんはせきをする拍子に尿が漏れたり、トイレに行こうとしても間に合わず漏れることがたびたびあった。(毎日04.12.22)

- (101) 受け持ちの女の先生が教壇から降りる拍子に、プットおならをした。(朝日96.01.26)

- (102) あわてた運転手がトラックを前に移動させた拍子に聡さんが転倒。頭を強く打ち、救急車で病院に運ばれた。(朝日00.07.05)

- (103) 道路を歩行中、民家から飛び出した犬に体当たりされた拍子に腰の骨を折った。(朝日97.06.06)

- (104) 金川さんがランドセルをつかもうとした拍子に、薬指が金具にはさまり、2カ月入院する傷を負った。男児は金川さんの言うことを聞くようになった。(毎日05.06.04)

- (105) ひとしきり物思いにふけた後、立ち上がろうとした拍子に、男はバランスを崩し、後ろ向きに転でしまう。(毎日99.01.29)

### 3.5 はずみに／で

「はずみに／で」は、ある事態が成立する〈直後〉に、それが〈きっかけ〉となって、別の事態が起こることを予告する。「はずみに／で」は、動詞述語の「シタ」につくことが多い(106)(107)。まれに「スル」につくこともある(108)(109)。「シテイル／イタ」「シナイ／シナカッタ」「シマス」などの形式にはつかない。使役の「-サセ-」の形式はとらないが、受動の「-サレ-」の形式をとることがある(110)(111)。また、「シヨウトシタ」につくことも

ある(112)(113)。

「はずみに／で」節の述語形式には、ヴォイスのカテゴリーは存在するが、アスペクト、肯定否定、スタイルのカテゴリーは存在しない。テンスと意志性に関するムードについては、わずかながら存在する。

(106) 「誰。ああ、これ？ 馬鹿ねえ、あんた、そんなものいちいち持って歩けやしないじゃないの。幾日も置き放しにしとくことがあるのよ。」と笑ったはずみに、苦しい息を吐きながら目をつぶると、襟を放して島村によろけなかった。(雪国)

(107) 事故は、タンクの内ぶたを固定する支柱が腐食して破断し、内ぶたが内壁に衝突したはずみで引火し、爆発したとみられる。(毎日05.04.14)

(108) 「ええ。」と、うなずくはずみに、葉子はあの刺すように美しい目で、島村をちらっと見た。島村はなにか狼狽した。(雪国)

(109) 一度なぞ、林からとびだして草むらのネズミをつかんだフクロウが林へもどるはずみにテントの支柱にぶつかったことがある。(パニック)

(110) ……、渡辺さんは道路に投げ出されたはずみに頭を強く打ってまもなく死亡した。(朝日91.08.29)

(111) 手前の乗用車は、大型トラックに追突されたはずみで前のトラックにぶつかり大破＝午後9時40分ごろ(朝日02.10.17)

(112) サービスを受ける人には、車椅子から動こうとしたはずみに骨折したり、寝返りで骨を折ったりということもあります。(毎日99.10.16)

(113) 女性は避けようとしたはずみで転倒し、右まぶたに切り傷を負った。(毎日04.05.27)

「はずみに／で」節は、一般にアスペクトのカテゴリーが欠けていて「シテイル／シテイタ」を述語にとらないが、以下の孤例があった。

(114) 席で一人昼食を終え、読書をしている斜め前で、私への攻撃のリーダー格の男子が、ふざけていたはずみで、口にくんでいた牛乳を前の机の上に、吐き出してしまったのです。(毎日01.08.26)

### 3.6 やさき(に)

「やさき(に)」は、ある事態が成立する〈直前〉に、期待する事態とは異なる別の事態が起こることを予告する。動詞の「スル」(115)(116)、「シタ」(117)(118)、「シテイル」(119)(120)、「シテイタ」(121)(122)、「シ

ヨウトスル」(123)、「シヨウトシタ」(124)、「シヨウトシテイル」(125)、「シヨウトシテイタ」(126)などの形式につく。使役の「-サセ-」や受動の「-サレ-」にもつく(127)(128)。「シナイ／シナカット」にはつかない。丁寧の「-マス-」もあらわれにくい。

「シタ／シテイタ／シヨウトシテイタ」の語形のほうが「スル／シテイル／シヨウトシテイル」の語形より多くあらわれる。また、「シテイタ／シヨウトシテイタ」が「シタ」より多くあらわれることも、この節の特徴である。

「やさき(に)」節の述語には、ヴォイス、アスペクト、テンス、ムードのカテゴリーは存在するが、肯定否定、スタイルのカテゴリーは存在しない。

(115) 得意先へ卵の配達に出る矢先、昼のテレビニュースが「感染の疑い」と伝えていた。(朝日04.12.24)

(116) 米国に屈して牛肉輸入を再開する矢先、BSEで迷走したあの武部勤氏を幹事長に起用したのである。(週刊朝日04.10.15)

(117) 夫婦があきらめかけた矢先、不妊治療が成功して、ジヨオンが妊娠する。(毎日02.06.07)

(118) あれっ、結構先手がやれるじゃないかと結論が出なかった矢先、森内が〔後〕4六桂を示した。(毎日02.03.16)

(119) 上土幌町に住む知人によると、エゾヤマザクラも咲いてそろそろ花見でもしようかと思っている矢先にこの寒さに襲われ、一日中ストーブをつけていないといられないほどだという。(毎日05.05.15)

(120) 1年半で離任することになった感想を学生時代からしているラグビーに例え「劣勢の後半の中、ばん回もあると思って戦っている矢先にノーサイドの笛が吹かれ、ぼうぜんとしている状態」と表現した。(毎日04.08.07)

(121) 夫は現在66歳。やっと年金がもらえる年齢を迎え、もう少し体に優しい仕事に変わろうかと考えていた矢先、思いがけず「末期がんの宣告」を受けた。(毎日05.08.18)

(122) 結婚50年目の3月、「金婚式を」と会場を予約し、楽しみにしていた矢先、入院して4月には帰らぬ人となりました。(毎日02.03.12)

(123) 柳川喜郎・同町長や反対派住民らは「建設の是非を住民投票で問おうとする矢先に、県職員が地元で建設前提案を説明することは地方自治の本旨に反する」などと厳しく批判している。(毎日97.05.30)

- (124) 三井容疑者は「検察の調査活動費は裏金」とマスコミや国会などで告発しようとした矢先に逮捕された。(毎日02.05.11)
- (125) 古川禎久衆院議員(自民・宮崎3区)「安藤丸が港から出ようとしている矢先に『財政危機』『三位一体の改革』という波が来た」。(毎日04.01.09)
- (126) アジア初のベスト4入りを果たし、同日夜には、大邱での3位決定戦で有終の美を飾ろうとしていた矢先に、死者まで出した交戦。(毎日02.06.30)
- (127) たまらず庁内に事務刷新検討会議を発足させた矢先、公然わいせつ事件も起きた。(毎日02.10.31)
- (128) 78年、関脇に昇進し、大関候補と目された矢先、左ひざじん帯断裂で、幕下30枚目まで転落した。(毎日04.05.22)

### 3.7 最中(に)

「最中(に)」は、ある事態が進行している〈時間(帯)〉を意味し、別の事態が起こることを予告する。「最中(に)」は、述語「シテイル」(129)(130)「シテイタ」(131)(132)形式につくことが多い。〈時間(帯)〉を意味する「最中(に)」には、運動の持続相を特徴づける、これらの形式がなじむのである。しかし、「スル」(133)(134)「シタ」(135)(136)のことも、まれにある。使役や受動の形式もあらわれる(137)(138)。「シナイ／シナカッタ」にはつかない。丁寧の「-マス-」もあらわれにくい。

「最中(に)」節の述語形式には、ヴォイス、アスペクト、テンスのカテゴリーは存在するが、肯定否定、スタイル、ムードのカテゴリーは存在しない。

- (129) ふたりの話は、平さんとかいう男のことなんだが、ばくちをやっている最中に手がいって、その男は引っぱられて行ったのだそうだ。(路傍の石)
- (130) すると今夜も、自分がこうしてびしょ濡れになって此処を歩いている最中、大森の家には誰かが来ていやしないだろうか？(痴人の愛)
- (131) 家出しようとして着替えていた最中に妹に見られたという。(毎日05.07.01)
- (132) 江津高1年のとき、球技大会でバスケットをしていた最中に相手とぶつかり、脊髄(せきずい)を痛めた。(毎日04.10.17)
- (133) 同じ地で戦った日本人男性によると、物資を輸送する最中に敵機の攻撃を受けて近海で沈没する船を

目撃したという。(毎日05.08.06)

- (134) 明治から昭和20年代ごろまでは毎年のようにイカが押し寄せたといい、「明け方に見回りする最中に拾ったイカで、駐在さんが家を建てた」「30隻もの船でイカの大群を待ち受けた」など、さまざまな言い伝えが残っている。(毎日05.06.22)
- (135) ワイヤは機体がバランスを崩した最中に外れたとの情報もある。(毎日05.05.18)
- (136) 動転した母親が同じアパートの別の棟に住む母親の祖父母に連絡を取るため、部屋を出入りした最中に外出していた女兒が戻ってきたという。(毎日02.04.06)
- (137) この炭鉱は採掘が許可されておらず、炭鉱経営者が村民に違法採掘をさせている最中にガス爆発が起きたという。(毎日05.02.18)
- (138) また、ネットオークションで偽物の焼酎「森伊蔵」が販売されていた問題で「芋焼酎が評価されている最中に、特定銘柄の偽造などもってのほか」と遺憾の意を示した。(毎日04.05.11)

「最中(に)」節には、一般に否定の形式をうけないのであるが、以下のような実例がある。孤例である。

- (139) 主な収入は、ファミリー企業の電気機械器具会社「日本トーター」の株式売却益で、笹川氏は「景気回復が思うように行かない最中に、多額の納税をすることは面はゆい気持ち」と話す。(毎日00.05.16)
- (140) 銀行の正常部分の仕事は、決して景気がよいとはいえない最中に、まれにみる膨大な利益を得たということだ。(毎日96.05.28)
- (141) 同事件の余震がまださめない最中に、自民党のドンである金丸氏が政治資金規正法に反する巨額の金を堂々と受け取っていたのだから、果たして政府・自民党に本気で法改正する意思があったのかどうか、疑わしい限りといえよう。(毎日92.08.28)

また、「シヨウトスル」という形式もふつううけないのであるが、以下のような実例がある。

- (142) 野呂市長は、00年5月の初当選以来、新しい行政運営の指針となる市政マネジメントシステムの構築に取り組んできたが、「さらにグレードアップしようとする最中に市政を放り出すということは大変申

し訳ない」とわびた。 (毎日03.02.11)

- (143) しかし、反対派の市民グループが質問を続けようとする最中、「予定時間を45分オーバーしている」として、午後9時45分に閉会。 (毎日97.01.24)

### 3.8 さなかに(に)

「さなかに(に)」は、ある事態の〈状態〉にあることを意味し、別の事態の成立や存在を予告する。「さなかに(に)」は、動詞述語の「シテイル」(144) (145)「シテイタ」(146) (147)につく。受動を特徴づける「-サレテイル」につくこともある(148)。〈状態〉を意味する「さなかに(に)」には、運動の持続相を特徴づける、これらの形式がなじむのである。動詞述語の「スル」(149)につくこともあるが、これはまれである。静的動詞の「ある」(150)や形容詞述語(151) (152)や名詞述語(153)につくこともある。「スル/シタ」「シナイ」「シヨウトスル」といった形式には、ふつうつかない。丁寧の「-マス-」もあらわれにくい。

「さなかに(に)」節の述語形式には、アスペクト、テンスのカテゴリーは存在するが、ムード、肯定否定、スタイルのカテゴリーは存在しない。ヴォイスは部分的に存在する。

- (144) 芸人としてブレイクしているさなかに、テレビ番組と雑誌のタイアップ企画としてセミヌードになった。

(毎日05.04.28)

- (145) ちょうど彼女が本選でリストのピアノ協奏曲第1番を弾いているさなかに、会場の東京オペラシティが激しく揺れる新潟県中越地震が起きたのだが、浮足立つ周囲をよそに「全く気づかなかった」と、彼女は集中力を一瞬たりとも切らすことがなかった。

(毎日05.04.11)

- (146) 組合員らが商店街を盛り上げようと活動していたさなかに、通りにあった大型店2店が前後して撤退。客足が次第に遠のいてしまった。 (毎日05.04.22)

- (147) 若きソリストとして大活躍していたさなかに、文化大革命が起こり、反動分子として強制労働に追いやられる。 (毎日05.04.21)

- (148) 外では空襲警報が鳴り、『天皇陛下万歳』の旗が振られているさなかに、じっと恋人の絵を描き続けている。あのひたむきな時間は尊いと思うのです」と語りかけている。 (毎日05.08.05)

- (149) プロ野球が参入争いで盛り上がるさなかに、ベガル

タの現状を象徴する「事件」もあった。

(毎日05.01.01)

- (150) 住宅建設が厳しい状況にあるさなかにに始まった北九州夏の陣、軍配はどちらに? (毎日02.08.09)

- (151) 残暑きびしいさなかに、大岡昇平の「俘虜(ふりょ)記」に集中して「再読」した。 (毎日00.09.06)

- (152) クソ暑いさなかににドラマでもない、内容も硬い暗い、恥をかくのでは、と思っていたが。こなせば、記録もチームの成績も自然とついてくるはずだ。

(毎日00.09.08)

- (153) 戦前から戦後にかけて、フランス映画といえば、暗い詩情とベシミズムに彩られた深刻なムードがある種の傾向だったさなかに、ほのぼのとした、アメリカ映画的な明るい楽天主義にも似たハッピーエンドをもたらした異色作である。 (毎日96.09.01)

以下にあげるのは、「さなかに(に)」節の孤例である。

「さなかに(に)」節には、まれに「シタ」につくことがある(154) (155)。また、「シナイ」をうける「さなかに」の例も孤立したものである(156) (157)。ちなみに「シナカット」をうける具体例はみつかっていない。さらに、「シヨウトシタ」についての例もある(158)。書き手は、それぞれの述語の中に持続性をよみこんでの使用かとおもわれる。

- (154) 彼は刑務所で陶芸の魅力を知り、備前焼の窯元で修業する。応援してくれる人もいて、鳥取県に自分の窯を開いて順調な生活を始めたさなかに、中国北宋時代の幻の窯、汝窯(じょよう)で焼かれた青磁器に出会い、魂を奪われたようにひかれる。

(毎日04.08.29)

- (155) 男性は、東側に800メートルほど移動したさなかにに、ビルが崩壊するのを目撃した。 (毎日01.09.12)

- (156) ところで、私がインターネットを始めたのは一昨年春です。その年の大震災が契機でした。電話がこみあってつながらないさなかに、パソコンを使った通信だけはなぜか通じたことがあって「何としても始めておかねば」と決心したのでした。

(毎日97.01.26) 投書

- (157) いち江さんが収容所で4男を出産し(数日後死亡)、体の動きがきかないさなかに博巳さんの姿が見えなくなったのだ。 (朝日86.02.25)

- (158) 政府が自衛隊のイラクへの年内派遣を決定しよう

としたさなかに、派遣を想定していたイラク南部で  
イタリア軍警察が自爆テロの攻撃を受けて30人近い  
犠牲者が出たのだ。(毎日03.11.16)

### 3.9 おり(に)

「おり(に)」節は、ある事態が成立する〈とき〉を意味し、別の事態が起こることを予告する。「おり(に)」は、「スル」(159)「シタ」(160)「シテイル」(161)「シテイタ」(162)「シヨウトスル」(163)の形式につく。使役「-サセ-」(164)や受動「-サレ-」(165)の形式もある。まれに、丁寧な語形「-マス-」があらわれることもある(166)。「シナイ」「シナカット」のような否定の形式はとれない。つまり、未成立の事態には使えないのである。

「おり(に)」節の述語形式には、ヴォイス、アスペクト、テンス、ムード、スタイルは存在するが、肯定否定のカテゴリーは存在しない。

- (159) 朝はやくおきて、そとをあるきに出るおりに、牧場のほとりを通りかかると、それが晴れた朝ならば、きまって見る風景がある。(焼跡のイ)
- (160) 「何だこら、何をぬかす。馬鹿も、休み休み云え。わしが広島から逃げ戻ったおり、あのとき小母はんは、わしの見舞に來たのを忘れたか。わしのことを尊い犠牲者じゃと云うて、嘘泣きかどうかしらんが、小母はんは涙をこぼしたのを忘れたか」(黒い雨)
- (161) 改憲論もさかんに出ているおり、まず今の平和憲法のよさを十分に知って議論してほしいという目的もある。(朝日03.05.01)
- (162) 3日午前6時半ごろ、加茂市下土倉で地元の猟友会が出掛けていたおりにクマがいるのを猟友会会員が発見、射殺した。(朝日01.11.04)
- (163) 纏まった書物を購おうとする折、その度ごとに銀行へ急ぎ、カバン一杯の紙幣をかかえて書店へ駆けつけねばならなかった。(楡家の人)
- (164) 人の死はまだ体験したことはないが、昨年、飼い犬が大往生を遂げ、火葬する場まで同行させたおり、怖い、寂しい、悲しい、仕方がないを実感したようです。(毎日01.07.27)
- (165) 同道路は雲仙・普賢岳噴火災害で国道251号が寸断されたおり、代替道路としての役割が認識され、一九九三年道路災害防除事業として採択された。(朝日01.02.27)
- (166) 今朝、後夜のお勤行に参りました折、西の妻戸か

ら立派な男の方が出てくれました。(新源氏物)

### 10. 際(に)

「際(に)」は、ある事態が成立する〈とき〉を意味し、別の事態が起こることを予告する。「際(に)」がうける述語形式は制限がゆるく、「スル」(167)「シタ」(168)「シテイル」(169)「シテイタ」(170)「シナイ」(171)「シナカット」(172)「シマシタ」(173)「シヨウトスル」(174)「サセタ」(175)「サレタ」(176)などがある。

「際(に)」節の述語形式には、ヴォイス、アスペクト、テンス、ムード、肯定否定、スタイルのカテゴリーが存在する。

- (167) 会社からのお迎えの車が来て、マンションの前の石段を降りる際、踏み外して足首をひどく振ってしまいました。(錦繡)
- (168) 諸説紛々で定かではないが、一説によると、紀元前四世紀にトロイを訪れたアレクサンダー大王とその友人たちが、アキレスの墓に詣でた際、古代の風習にのっとり墓の回りを裸で走り回ったのがその起源という。(若き数学)
- (169) 矢羽田社長や従業員が舟のエンジンを整備して別の場所で休憩している際、1人が物音に気づいて見に行くと、作業場で使っていた廃油ストーブの周辺が燃え上がっていたという。(朝日05.02.07)
- (170) 和歌山東署によると西裏さんが1階の居間でストーブに灯油を入れている際、火の手が上がったといい、同署が詳しい原因を調べている。(朝日05.03.25)
- (171) 緊急時や総務部員がいない際に現金が必要な場合の対応を考える。(朝日04.09.12)
- (172) また、玄関で靴をそろえなかった際に「靴が泣いているよ」と孫に言われた体験談も披露し、会場の笑いを誘った。(朝日01.09.22)
- (173) 4時ごろに1度、目を覚ました際に、同装置を解除して再び眠ってしまったという。(毎日02.10.02)
- (174) 取材記者には、耳で聞いた言葉を文字にしようとする際、語の使い方が必ずしも適切でなくとも、できるだけ発言に近い表現でという意識が働く。(毎日04.06.22)
- (175) さらに、校長や教頭が元教諭を退場させた際、「おい、さわるんじゃない。何でおれが出るんだ」などと怒鳴り、式の開始を数分間遅らせて、進行を妨げたとされる。(朝日04.12.04)

- (176) 葛さんは保管されている西北大学で墓誌を観察し、  
掘り出された際に欠けた文字の復元を試みた。

(毎日05.01.12)

(朝日05.03.25)

本稿でとりあげた単語の、従属接続詞としての用法の中で、連用節全体を「は」で主題化できるものとそうでないものがある。「たび(に)」「ついでに」「途端(に)」「拍子に」「はずみに」「やさき(に)」は、「は」がつかない。それに対して、「最中(に)」「さなか(に)」「おり(に)」「際(に)」は「は」がつくことがある(例文(177)～(180))。なかでも「おり(に)」「際(に)」は、多用される形式で、〈とき〉をあらわす連用節と〈条件〉をあらわす連用節とが交錯する用法といえる。うける述語形式の制限がゆるやかである点、「の」をしたがえて、連体の機能をはたす点で、「とき」「場合」のような、〈とき〉を特徴づけるもっとも一般的な単語に通じる。

- (177) 育児をやっている最中はとにかく大いに夢を見ましょう。小学校、中学校と上級生になっていけば、嫌でも現実が見えてきますから。(毎日05.03.28)
- (178) お盆の暑いさなかは、美しく幻想的なパレエ「眠れる森の美女」はいかがですか？(毎日05.08.15)
- (179) 私が数年前に若山牧水賞の取材に訪れた折は冬の終わりであったが、宮崎の丘に菜の花が咲き誇るのは、関東より随分早いのだろう。(毎日05.06.12)
- (180) 80年代に売上税導入の話が持ち上がった際は「売上税粉碎」「国会を解散せよ」ののぼりを立ててデモをし、反対集会も開いた。(毎日05.09.10)

「あかつき」にも以下のような従属接続詞として用法がみられるが、もっぱら「あかつきには」の形式で使用されるのが特徴である。〈希望する事態が実現した場合〉という仮定的な意味合いをもつ。

- (181) 治療師となったあかつきには、営業マンとして培ったノウハウを患者さんへのサービスに生かし、お客さまからも、そして私からも「ありがとうございます」と言葉を交わしたいものです。(毎日05.06.17)
- (182) 連合茨城の石井武会長は11日、水戸市内で開かれた「新春の集い」で、9月に予定される次期知事選について「知事が(立候補を)表明されたあかつきには、きちんと受け止める考えはある」と述べ、橋本昌知事の4選を支持する意向を表明した。

この章で記述したことをまとめる。

それぞれの単語の意味は、以下のとおりである。

- 1 「たび(に)」は、ある事態が成立すると〈いつも〉、別の事態が成立することを予告する。
- 2 「ついでに」は、あることを行なうことを〈好機〉として、別のことを行なうことを予告する。
- 3 「途端(に)」は、ある事態が成立する〈直後〉に、別の事態が起こることを予告する。
- 4 「拍子に／で」は、ある事態が成立する〈直後〉に、〈それが〈きっかけ〉となって〉、別の事態が起こることを予告する。
- 5 「はずみに／で」は、ある事態が成立する〈直後〉に、それが〈きっかけ〉となって、別の事態が起こることを予告する。
- 6 「やさき(に)」は、ある事態が成立する〈瞬間〉あるいは〈直前〉に、期待する事態とは異なる別の事態が起こることを予告する。
- 7 「最中(に)」は、ある事態が進行している〈時間(帯)〉を意味し、別の事態が起こることを予告する。
- 8 「さなか(に)」は、ある事態の〈状態〉にあることを意味し、別の事態の存在を予告する。
- 9 「おり(に)」は、ある事態が成立する〈とき〉を意味し、別の事態が起こることを予告する。未実現のことには使えない。
- 10 「際(に)」は、ある事態が成立する〈とき〉を意味し、別の事態が起こることを予告する。未実現のことにも使える。

10の節をアスペクト性からみると、「たび(に)」は〈反復相〉を、「途端(に)」「拍子に／で」「はずみに／で」「やさき(に)」は〈瞬間相〉を、「最中(に)」と「さなか(に)」は〈持続相〉を特徴づけていることが指摘できる。「おり(に)」と「際(に)」は無標で、特定の特徴をもたない。

「拍子に／で」「はずみに／で」は、〈とき〉にくわえて、原因・理由にかかわることもある。また、「おり(に)」「際(に)」は条件にかかわることもある。

次に、それぞれの従属接続詞がうけることのできる述語形式は表2のとおりである。「さなか(に)」は、形容詞述語や名詞述語をうけることもある(＋は存在を、－は不在をあらわす。＋は、特に多く存在する、(＋)は、部分的に存在する、(－)は、まれに存在する)。それらの述語形

表 2

述語形式 従属接続詞	スル	シタ	シテイル	シテイタ	シナイ	シナカッタ	-サレ-	-サセ-	-マス	シヨウトスル
1. たび (に)	+	-	-	-	-	-	+	+	-	+
2. ついでに	+	+	-	-	-	-	-	+	(+)	-
3. 途端 (に)	(+)	+	-	-	-	-	+	+	-	+
4. 拍子に	+	+	-	-	-	-	+	+	-	+
5. はずみに	+	+	-	-	-	-	+	+	-	+
6. やさき (に)	+	+	+	+	-	-	+	+	-	+
7. 最中 (に)	+	+	+	+	-	-	+	+	-	-
8. さなか (に)	(-)	-	+	+	(-)	-	+	-	-	-
9. おり (に)	+	+	+	+	-	-	+	+	+	+
10. 際 (に)	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

表 3

形態論的 カテゴリー 従属接続詞	ヴォイス	アスペクト	テンス	肯定否定	スタイル	ムード
1. たび (に)	+	-	-	-	-	+
2. ついでに	(+)	-	+	-	(-)	-
3. 途端 (に)	+	-	(-)	-	-	+
4. 拍子に	+	-	(+)	-	-	(+)
5. はずみに	+	-	(+)	-	-	(+)
6. やさき (に)	+	+	+	-	-	+
7. 最中 (に)	+	+	+	-	-	-
8. さなか (に)	(+)	+	-	-	-	-
9. おり (に)	+	+	+	-	+	+
10. 際 (に)	+	+	+	+	+	+

式を形態論的なカテゴリーでまとめたものが表 3 である。

#### 4. ま と め

本稿では、〈とき〉を意味する擬似連体節をうける従属接続詞をとりあげ、それらについて次の 2 点をあきらかにした。

- (1) いくつかの品詞を兼務すること、すなわち多機能であること。
- (2) 個々の従属接続詞は、固有の意味をもち、直接にうける述語形式に制限がきついものとゆるいものがあること。

日本語の品詞体系は、確立しているとはいいがたい。多くの問題をかかえている。品詞は、単語の文法的な特徴

(とりわけ統語論的な特徴) にもとづく分類であり、それを徹底させた分類がなされるべきである。既存の文法書や辞書は、単語の文法性を正当に記述していない。従来から副詞が品詞論のゴミ箱とよばれてきた。しかし、品詞論のゴミ箱は、副詞にとどまらず、一般に名詞あつかいされている単語群にも、名詞らしくない単語が多く存在しているのである。本稿でとりあげた 10 の単語も、従来、名詞あるいは形式名詞としてとりあつかわれてきた。しかし、それらの意味や文中での機能を考察すると、名詞とは異なる特徴をそなえていて、他の品詞に位置づけなければならない。

本稿の立場は、文の構造をとらえるときに、主要な単語を中心におくという点に特徴がある。機能語はあくまで主要な単語の文中での存在形式にくわるものであるとみなすのである。後置詞は名詞の、従属接続詞は文相当の形式

の、助動詞は動詞に代表される述語形式の、それぞれ文法的なすがたなのである。

### 注

(注1) 日本語の従属節をどのように分類整理するかについてはさまざまな提案がある。わたしは、断続を優先する従属節のタイプ分けを提案し、連体節の中に、真性連体節と擬似連体節があることを提示した(村木新次郎(2004)(2005))。さらに、擬似連体節をうけるものに、少なくとも、「よう」「みたい」「ほど」「ため」のような節全体を形容詞化する形式と「かたわら」「あまり」「おかげで」「くせに」といった従属接続詞があることを指摘した(村木新次郎(2005))。

(注2) 文相当の形式を、後続の節につなげていく形式としては、(1)語尾、(2)(狭義の)接尾辞、(3)助辞、(4)従属接続詞がある(村木新次郎(1991))。(1)~(3)は、広義の接尾辞に属し、単語内部の問題である。(4)は周辺的な単語のひとつで、中心的な動詞などの語形について、もっぱら文法的なはたらきをする形式である。述語の形式を、動詞の「食べる」の例で示せば、以下ようになる。

(1)「たべーれば」「たべーて」

(2)「たべーながら」「たべーつつ」

(3)「たべるーと」「たべたーので」

(4)「たべた ついでに」「たべるに つれて」

(注3) 三上章(1959, 2002)では、「トキ(ニ)」「オリ(ニ)」「タ(ン)」「ビ(ニ)」などを時に関する「名詞的吸着語」と位置づけている。また、日野資成(2001)では、このような「かたわら」「拍子」を、指示的機能をもたず、ふたつの節をつなぐ文法的機能をもつ「形式名詞」とみている。わたしは、この種の単語の多くは語彙的意味と機能の点からもはや名詞ではないとみる。「こと」に代表される形式名詞は(「とき」や「ところ」にも)、実質的な意味をもたないが、格機能をそなえているために、名詞の一種である。それに対して、「かたわら」や「拍子」は、語形が固定化され、名詞の本命である格の機能をうしなっているので、名詞ではない。その機能から判断すれば、それは従属接続詞である。

(注4) いわゆる文法化現象のひとつである。文法化は通

時的に変化していく言語の現象である。本稿では、考察の対象とした諸形式の歴史的な変化を扱ってはいない。もっぱら現代日本語の範囲で、共時的にどのような用法が競合しているかをみたものである。

(注5) 本稿でとりあげる形式は、多くの辞書では、名詞の中に位置づけられている。たとえば、『岩波国語辞典第六版』では、

【拍子】①(略) ②(略) ③(略) ④機会。はずみ。おり。とたん。「笑ったーに入れ歯が抜けた」

とあり、④の用法を、名詞の中のひとつの意味・用法としてあつかっている。他の辞書もだいたいこれと同じあつかいである。

学校文法に従えば、後置詞や従属接続詞という品詞は存在しないし、助動詞も本稿で用いるものと定義が異なる。

(注6) 「はずみに」には、以下のような使用例がある。

民主党が選挙協力をはずみに社民党との合併も視野に入れるのに対し、社民党はあくまで党の生き残りを探る。(毎日03.08.06)

これは「はずみにして」の形式動詞「する」の中止形が脱落したものと考えられるが、後置詞としての性質をそなえているといえる(村木新次郎(1983))。

(注7) 文字列「最中」は、「サイチュウ」「さなか」の双方の可能性が考えられる。次の例は「さなか」でないかと思われる。

この忙しい最中に、ランプそうじのじゃまをするような、ひまな人間がどこにいる。(路傍の石)

しかし、一般に、この判定は困難なので、明らかに「さなか」である場合を除いて、「最中」を「サイチュウ」とであるとみなすことにした。

(注8) 本稿では、連用節の述語部分に注目しただけである。本来ならば非述語部分の要素についての考察もしなければならない。非述語部分の考察とは、節内部における主語や主題の存否、主語が動作主であるか否か、固有の空間や時間の成分の存否といったことである(南不二男(1974)(1993))。また、さらには主節にはどのようなタイプの文があらわれるかという点にもいいおよぶことが望ましい。それらについては、ここでは保留される。主節における文のタイプを問おうすれば、話しこ



とばを考察の対象にしなければならないであろう。

(注9) 脱稿後、以下のような「ショウトスル」につく例がみつかったので、例文を補充する。

- ・私が眠ろうとするたびに誰かがやってきて私を叩き起こしたのだ。(世界の終)
- ・しかし僕がもがいて外国兵の腕からのがれようとするたびに、僕の尻はひくひく動くだけなのだ。(死者の奢)

## 付 記

この研究は、2005年度同志社女子大学学術研究推進センター助成(課題:日本語の従属節の類型)による成果の一部である。

## 用 例

『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』/『朝日新聞』(朝日新聞データベース「聞蔵」)/『毎日新聞』(毎日新聞総合データベースサービス)

## 文 献

- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』(むぎ書房)
- 鈴木重幸(1983)「形態論的カテゴリーについて」『教育国語』72(むぎ書房)
- 日野資成(2001)『形式語の研究——文法化の理論と応用——』(九州大学出版会)
- 三上 章(1953)『現代語法序説——シンタクスの試み——』(刀江書院、くろしお出版から復刊)
- 三上 章(2002)『構文の研究』(くろしお出版)(1959年、東洋大学に提出した学位論文)
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』(大修館書店)
- 南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』(大修館書店)
- 村木新次郎(1983)「「地図をたよりに人をたずねる」という言いかた」『副用語の研究』(明治書院)
- 村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』(ひつじ書房)
- 村木新次郎(2000)「「がらあき」「ひとかど」は名詞か、形容詞か」『国語学研究』39(東北大学文学研究科)
- 村木新次郎(2002)「日本語の文のタイプ・節のタイプ」『現代日本語講座 第5巻 文法』(明治書院)
- 村木新次郎(2004)「従属節の構造と体系」『2004日本言語文化教育と研究国際シンポジウム 予稿集』(中国日本語教学研究会)
- 村木新次郎(2005)「擬似連体節をうける従属接続詞——「かたわら」と「一方(で)」の用法を中心に——」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』5